



気になるあいつ
わかぎゑふ

双葉社

気になつてしまふ奴

先日まで劇団で「時の男」という芝居をやっていた。小劇場らしいエンターテイメント系の時代劇だった。自分で書いて演出してばかりだと、普段はちよつとした端役で顔を見せる程度にしか出ないのだが、今回はなぜかいい役だった。

理由は殺陣師がいたことだ。自分でそこまで演出の範囲にいれてると、役者を見ていないといけなのだが、今回は殺陣のシーンだけ前から見てくれる高倉良文という役者がいた。若い頃に地方周りの時代劇専門の劇団に居て、殺陣を覚えたらしい。飛んだり、斬る前に一度相手の剣を撥ねるような動きの多い華麗な殺陣をつけてくれた。自分も役者として出演してたが「やると疲れますよね、僕の殺陣」と自分で言っていたく

らいだ。

彼が居たことで、私は久しぶりに殺陣メンバーに入れられていた。子供の頃から剣道をやっていたので、これまでも女優扱いは受けずに、よく殺陣メンバーに入っていたのだが、今回は殺陣がつくごとに「ここも飛びましようか」「あ、ここも手を増やしましょう」とどンドン強い役になっていった。

おかげで、肩、背中、膝の周りに筋肉がついて、えらいことになっている。「女の体とちゃうわな」と女子楽屋で笑われるし、さんざんだった。

そんな私の役は平敦盛という、歴史上本当にいた少年の役で（事実上は強かったという記述はないですよ。念のため）一対一の斬りあいदै負けて、相手に「私の首をとれ」と言い、気高い平家の御曹司を全うする人だ。

舞台では首を落とすわけにはいかないので、身を差し出して、一撃で

斬られて絶命する。その時に相手の顔を見つめて倒れていくのだが（写真がそのシーンです）、こういう芝居をすると、後を引くんである。私の中では誇り高く、斬った相手に武士として「感謝」をささげて死んでいったつもりだった。そういうモチベーションを自分で上げて行くと、本当に自分が死ぬ瞬間を経験するような錯覚に陥る。まして、距離が近く、まさしく目の前に相手役がいるわけだから、お互いにたまらなくなる。

おまけに、相手を演じたのはうちの若手の役者だったので、目の前で少年を斬り殺す役にあたり、彼も本番から抜けられない感情を抱えることになったようだ。私たちは今、お互いを「気になってしまっ奴」として見つめている。役がまだ身体に半分残っているような感じだろうか。

芝居をやっていると、時々こんなことがある。演技を超えて、本気以上に本気になってしまう時、それは何年も気になる一瞬になる。

【著者略歴】

わかぎあふ

1959年、大阪府生まれ。女優、エッセイスト。1986年より故中島らも氏とともに劇団「リリパット・アーミー」を主宰し、現在同劇団の進化形「リリパット・アーミーII」の座長。1994年より演劇ユニット「ラックシステム」を旗揚げ。演劇制作会社「玉造小劇店」を運営し、女優のみならず、脚本、演出、メイクから衣装まで芝居全般にわたりその才能を発揮し続けるスーパーレディ。主な著書に『すみっこのすみっこ』『女体の神秘』『秘密の花園』『ぬくい女』『イブの抜け穴』『大阪弁の詰め合わせ』など多数。
